

Title	慶應義塾大学図書館所蔵 Adam Smithの自筆書簡二通をめぐって：とくに小池基之教授とI. S. Ross教授の転写の比較検討
Sub Title	Some notes on two autograph letters of Adam Smith in the possession of Keio University Library : with special reference to the transcripts of Professor M. Koike and of Professor I. S. Ross
Author	須藤, 壬章
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.3 (1978. 6) ,p.421(119)- 428(126)
JaLC DOI	10.14991/001.19780601-0119
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19780601-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学図書館所蔵

Adam Smith の自筆書簡二通をめぐって

——とくに小池基之教授と I. S. Ross 教授の転写の比較検討——

須藤 壬 章

まえがき

慶應義塾大学の三田図書館が所蔵する二通の Adam Smith の自筆書簡⁽¹⁾については、すでに本誌第 63 巻第 5 号で小池基之教授がその複写および全文の転写とともにその内容に関しての詳しい解説を書かれている⁽²⁾。この二書簡は一部を除いて未刊のものであっただけに、小池教授の解説は Smith の『国富論』執筆のための資料蒐集の一齣を明らかにした意味においてきわめて貴重なものである。

ところで 1977 年に *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith* (以下『スミス全集』と略記) の第六巻として公刊された *The*

Correspondence of Adam Smith⁽³⁾ (以下『書簡集』と略記) には、上述の慶應義塾大学図書館所蔵の Smith の二書簡も当然のことながら収録されている。しかし『書簡集』の編者はこの二書簡の所在を示すにあたって、いずれも東京大学図書館所蔵と記している⁽⁴⁾。慶應義塾大学は図書館長名でこの誤記の訂正を『スミス全集』の編集委員会に正式に申し入れたが、これに対して『書簡集』の実質上の編者である Ian Simpson Ross 教授から図書館長あてに返書が届けられた。それによると、上記の二書簡を編集するさいに Mossner 教授と Ross 教授は雄松堂書店の新田満夫社長から提供された同書店製作のファクシミリ版⁽⁵⁾にもっぱら依拠したとのことであるが、原本の所在を東京大学図書館所蔵とした経緯については何ら触れていない。このよ

注(1) 二通とも Sir David Dalrymple, Lord Hailes にあてたもので、日付は 1769 年 1 月 15 日と同年 3 月 12 日である。

(2) 小池基之「1769 年の Adam Smith—Adam Smith の Sir David Dalrymple, Lord Hailes 宛未刊の手紙について」(慶應義塾経済学会『三田学会雑誌』第 63 巻第 5 号, 1970 年 5 月), pp. 26—34.

(3) Ernest Campbell Mossner & Ian Simpson Ross (eds), *The Correspondence of Adam Smith* (Oxford: Clarendon Press, 1977).

(4) このほかに竹内謙二氏所蔵の 1769 年 5 月 5 日付の書簡(『書簡集』の No. 116) と京都外国語大学所蔵の同年 5 月 16 日付の書簡(『書簡集』の No. 119) も東京大学図書館所蔵と誤って記している。

(5) カナダの University of British Columbia の英語の教授。『書簡集』は *The Life of David Hume* (Oxford: Clarendon Press, 1954) を書いた Mossner 教授が Adam Smith の伝記を書くための基礎作業としてはじめられたものであったが、1971 年 Mossner 教授が病気のためこの仕事を断念してからは Ross 教授が編集担当者となった。詳しくは『書簡集』の序文および水田洋『社会思想の旅』(東京:新評論, 1975) の pp. 125—130 を参照。なお、『書簡集』の序文の中で (p. viii) スミスの書いた書簡の編集は Mossner 教授の分担とあるが、本稿では Ross 教授を最終的な編集責任者とみなしている。

(6) 1978 年 1 月 16 日付の図書館長高鳥正夫教授あての書簡のこと。この件に関しては三田図書館副館長石川博道氏の御教示を得た。また、Smith の自筆書簡の調査にさいしては、三田図書館の御協力をいただいたことを記して謝意を表す。

(7) 『書簡集』の 'Acknowledgements' (p. xi) を参照。1968 年 5 月 21 日ロンドンで行なわれた入札会で、日本にある Smith の自筆書簡四通を雄松堂書店が落札したのである。

(8) 雄松堂書店が特別に製作したファクシミリ版 *Four Autograph Letters of Adam Smith to Lord Hailes, 1769* Kirkcaldy のこと。

(9) この件については新田満夫氏にも伺ったが、今のところ不明である。

うに『書簡集』の編者がじかに原本にあたるという作業をはぶいたために、そのほかにもいくつかの転写上の誤記や文字の脱落がある。Ross教授の編集した『書簡集』の転写を小池教授が1970年に発表した転写と比較してみると、かなり異なる箇所があることがわかる。筆者は両者の相違点を究明するために、三田図書館所蔵のSmithの自筆書簡に直接あたり、Smithの筆跡の研究とともに二書簡の詳細な調査を実施してみた。本稿は筆者の調査をふまえた小池教授とRoss教授の転写の比較検討であると同時に、Smith研究の一資料をできるだけ正確に提供しようとするものである。

1. Lord Hailes について

三田図書館が所蔵する Smith の自筆書簡は二通とも Sir David Dalrymple, Lord Hailes にあてたものであることは冒頭で述べたが、この Lord Hailes なる人物について小池教授とは別の観点から簡単な解説を試みることにする。

Lord Hailes は1726年10月28日にエディンバラで生まれた。⁽¹⁰⁾ イートン校で学んだのち、民法の研究のためオランダのユトレヒト大学に遊学する。1746年スコットランドに帰り、1748年2月には弁護士資格を得た。その人柄と学殖により法律家としての名声を博し、1766年 Lord Hailes として高等民事裁判所の判事に昇進したのである。本稿で取り上げた Smith の二書簡が書かれたのは1769年であるから、Lord Hailes がこの地位にあったときのことである。

判事の職務にたずさわるかたわら、Lord Hailes は歴史や文学の研究もすすめていた。その間 Samuel Johnson, Burke, Horace Walpole などのイングランドの文人たちと文通している。『書簡集』の中には Lord Hailes にあてた Smith の書簡が五通あるもの

の、Lord Hailes 自身は David Hume, Smith, William Robertson などといった当時のスコットランドにおける文化的指導者たちとは親交をもたず、エディンバラ選良協会 (Select Society of Edinburgh) においても積極的な活動をみせなかったということは注意すべき事実である。

1759年にグラスゴー大学で Smith の文学講義を聞いた James Boswell⁽¹¹⁾ の *Life of Johnson* には、この Lord Hailes がしばしば登場する。Boswell は Lord Hailes をたいへん尊敬していて、「非常に創意に富んだ人で、すぐれた学者、的確な批評家でもあり、しかも立派な人物⁽¹²⁾」であるとさえ言っている。Boswell はロンドンへ出て来てからのちも定期的に Lord Hailes に手紙を書き、助言を求めたりしているのである。

Life of Johnson を繙くと、1763年7月14日の夜に Boswell は Lord Hailes からの手紙の一節を Johnson に読んで聞かせている。Lord Hailes の Johnson への崇拜ぶりがよくうかがえるので、その一節の前半を下に引用してみよう。

貴君がサミュエル・ジョンソン氏との友誼を得られたことを思うと、まことに欣快の至りです。ジョンソン氏はイングランドの生んだ最高の倫理的な作家のひとりです。と同時に、私は貴君がそのような人と心おきなく、打ちつけて対話できることをうらやましく思います。どうか貴君からジョンソン氏によるしくお伝え下されたく、また『ラムプラー』誌と『ラセラス』の著者に対して私が尊敬の念を⁽¹³⁾ いただいていることをもお伝え下さい。

上に示した一節の中で、とくに Johnson を「イングランドの生んだ最高の倫理的な作家のひとり」とする讃辞がわれわれの注目をひく。これに対して Johnson も Lord Hailes の立派な人柄や学者としての才能を高く評価しているのである。

Lord Hailes の著作は歴史・法律・宗教などの多方

注(10) Lord Hailes の伝記的事項の記載にあたっては主として Sir Leslie Stephen & Sir Sidney Lee (eds.), *The Dictionary of National Biography* (London: Oxford University Press, 1921—1922), V, 403—406 に依った。J. L. Smith-Dampier, *Who's Who in Boswell* (New York: Russell & Russell, 1935), p. 102 には非常に簡潔な Lord Hailes の解説がある。

(11) John Rae, *Life of Adam Smith* (Reprint; New York: A. M. Kelley, 1965), p. 35. 大内兵衛・大内節子訳『アダム・スミス伝』(東京:岩波書店, 1972), p. 44.

(12) Frederick A. Pottle (ed.), *Boswell's London Journal 1762—1763* (London: Heinemann, 1950), p. 188.

(13) R. W. Chapman (ed.), *Boswell's Life of Johnson* (New ed.; Oxford: Oxford University Press, 1970), pp. 306—307. 神吉三郎訳『サミュエル・ジョンソン伝(上)』(『岩波文庫』; 東京:岩波書店, 1941)は抄訳で、この部分は訳出されていない。上の引用文にある『ラムプラー』誌は1750年にジョンソンが創刊した週刊誌で、『ラセラス』は1759年刊行のジョンソンの教訓的物語。

面にわたり、*Dictionary of National Biography*によれば1751年から1788年の間で43を教える。主著としては *Annals of Scotland* (1776) があげられる。

2. 第一書簡

第一書簡は1769年1月15日付の Lord Hailes あてのもので、『書簡集』ではNo. 115 (pp. 139-140) の書簡のことである。この書簡の書かれた1769年がSmithの生涯の中でいかなる位置を占めるか、ということについて以下略述してみよう。

1766年11月フランスから帰国した Smith は、しばらくロンドンに滞在して『道徳感情論』第三版の準備などにたずさわった。翌1767年5月Smithは郷里コーディに帰り、それ以後は『国富論』執筆のための研究に専念する。『国富論』が公刊される1776年までの期

間に関する「時折の書簡が彼の研究の上に投げかける光というものがなかったならば、この9年間の Smith の生涯の物語は9行ほどでほとんど書かれたかもしれない⁽¹⁴⁾」という Hirst のことばは Smith の『国富論』執筆への専心ぶりを述べたものであり、本稿で扱う二書簡はまさに「彼の研究の上に投げかける光⁽¹⁵⁾」なのである。ちなみに水田洋教授の「年譜」や田添京二教授の「アダム・スミス年譜⁽¹⁶⁾」では、1768年と1769年はまったく空白になっている。

1月15日付の書簡の全文をそのままの形で示してみよう。小池教授と Ross 教授の転写の異なる箇所は、下の注の中で小池教授の転写を *K*, Ross 教授のものを *R* として明示した。たとえば, *prix*] *K*; *prise* *R*. は小池教授は *prix* と読み、筆者の調査でもこれをと、一方 Ross 教授は *prise* と読んでいることを示している。

(1頁) 1

Kirkaldy 15 : Jan : 1769

My Lord

I am extremely obliged to your Lordship for the very polite Message you was good as to send me last week
5 by Mr John Balfour. The Use of your Lordships collecti=
=on of Papers concerning the Prices of Corn & other Provi=
=sions in Antient times will lay me under a very great
obligation. I have no papers upon this -upon- subject except
an account of the fiars of Mid Lothian from the 1626 &
10 this was copied too from a Printed Paper produced in a
process before the Court of Session some years ago. I
expect soon to get some others, particularly an account
from the Victvalling office. I have, however, a good
15 number of printed Books such as Fleetwood, Du Prè
de St Maur, Police des Grains, Messance sur la Po=
=pulation & sur les prix des grains, Essays on the Corn
trade &c; All of which, except Messance, your Lordship
has probably seen: His accounts go no further back
than 1670. I look upon him, however, to be the most ju=
20 [=]dicious author of them all. I have made a good number

注(14) Francis W. Hirst, *Adam Smith* ("English Men of Letters"; London: Macmillan, 1904), p. 144. 遊部久蔵訳『アダム・スミス』(東京:弘文堂, 1952) p. 142. 訳文は遊部訳どおりではない。

(15) 大河内一男編『国富論研究Ⅲ』(東京:筑摩書房, 1972), p. 273.

(16) 大河内一男監訳『国富論Ⅲ』(東京:中央公論社, 1976), pp. 483-484.

25

of remarks both upon the accounts given in these books, & upon some things relating to the same subject which I have found in the History of the Exchequer, in the English Acts of Parliament, & in the Ordonnances of the french Kings. My own Papers are in very great disorder & I wait for some further informations which I expect from different quarters before I attempt to give them the last Arrangement. As soon as they are fit to be seen I shall be very happy

- (注) 1. Kirkaldy] *K*; Kircaldy *R*. *R* ではこの地名のあとにコンマがあるが、書簡にはなし。Jan のあとに*R*では省略点があるが、実際にはなし。また、*K*にあるコロンが、*R*ではなし。
4. Message] *R*; message *K*. week] *K*; *R*では欠落。なお、*R*では[so] goodと補って読む。
5. Use] *R*; use *K*. ところで、現代のような分節法(syllabication)は確立していなかったので、スミスは'collecti='のようにハイフンとしてやや斜めの(=)を用いている。次行にも、'on'のように(=)を書いていることに注意。エリザベス朝でもそうであった。Cf. 大塚高信『シェイクスピア筆蹟の研究』(東京: 篠崎書林, 1952), p. 22.
7. Antient] *R*; antient *K*.
8. -upon] 消した語をそのまま示した。
9. Mid] *R*; Mcd *K*. なお、Mid Lothian は Midlothian のことで、スコットランド南東部の州で、首都は Edinburgh である。&] *K*; and *R*. *R*では書簡中の&はすべてandとする。*R*ではthe [year] 1626と補って読む。
14. Prè] *K*; Pré *R*. ちなみに、『スミス全集』の『国富論1』のp. 199では、Mr. Duprè de St. Maurとなっている。
16. &] *K*; et *R*. prix] *K*; prise *R*. スミスの'x'の書き方は独特で'se'のように見えるのは事実であるが、英語の'price'に当たるフランス語の'prix'と読むのが正しい。
17. trade] *K*; Trade *R*. *R*ではこのあとにコンマがあるが、実際にはなし。
18. further] *K*; farther *R*. スミスの'a'は上が開いていて、たしかに'u'のように見えるが、26行目の'further'などから判断した。
22. Some things] *R*; Somethings *K*.
28. Arrangement] *R*; arrangement *K*.

(2頁) 1

happy to communicate them to your Lordship, if you will give me leave either to send them to you or to read them to you.

5

I am very much ashamed of having delayed so long to answer a very Polite letter I had the honour to receive from your Lordship some time ago. I proposed to read over the Scotch Acts & to compare them both with our own historians & with the laws of some other nations that I have had occasion to look into, in order

10

to answer it as much to your satisfaction as I could. I have not yet had time to do this; for tho' in my present situation I have properly speaking nothing to do, my own schemes of Study leave me very little leisure,

15 which go forward too like the web of penelope, so
 that I scarce see any Probability of their ending.
 Your Lordships remarks upon the Scotch Acts seem
 to be very much of the same ^{nature} with those of Judge
 Barrington upon the English Statutes which
 have been so very universally approved of.

20 A work of this kind cannot fail to both extremely
 useful & very amusing to all those that are curi-
 [=]ous in the History of their own country. I should
 be very happy to contribute any thing in my Power
 to the improvement ^{of it}. I am afraid however I shall

25 be able to contribute but very little; & it will
 be some time before I can contribute even that
 little. I have the honour to be with highest respect
 & esteem My Lord your Lordships Most Obedient
 Servant Adam Smith

- (注) 1. happy] 前頁の末尾の語をもう一度書くのはこの時代の慣わし。
 9. occasion] K; occasions R.
 11. this のあとは K ではコンマだが, R のセミコロンが正しい。
 17. nature] 挿入語で, 挿入箇所をスマスは脱字記号の (∠) という印で示している。
 19. very] K; R では欠落。
 20. R では, to [be] both と補って読む。
 22. [=]ous] K では, '=ous' となっているが, 実際にはハイフンの (=) はなし。
 23. any thing] anything K, R.
 24. of it] 追加した語句。

(3頁) 1 If your Lordship wishes to see any of the Books
 I have on the Prices of Provisions they are all at
 your service, as are likewise any Papers upon the
 same subject which I may hereafter be able to collect.

3. 第二書簡

第二書簡は1769年5月12日付のもので、『書簡集』で

は No. 118 (pp. 151—152) にあたる。これは同年5月
 6日付の Lord Hailes からの書簡(『書簡集』の No. 117,
 pp. 143—150) に対する返書で, 資料研究としては両者
 を合わせて読まなければならない。

(1頁) 1 My Lord
 I received the favour of your Lordships Letter in
 due course of Post, & have read over the Papers you enclosed
 along with it; with great pleasure & attention. I am greatly

5 obliged to your Lordship for them: they will be of very great use to me.

I shall only observe to your Lordship that all the estimated prices of grain among our ancestors seem to have been extremely Loose & inaccurate: ~~The~~ & that the same nominal sum was frequently considered as the Average price both of grain & of other things during a course of years in ^{which} considerable alterations had been made upon the intrinsic value of the Coin. Thus ^{both} in 1523. & in 1540. the Boll of barley & meal is estimated at 13S & 4D, tho in the first of these two periods there ^{were} ~~was~~ only seven money pound[s] coined out of the pound weight of Silver; & tho' in the second there were nine pounds, twelve Shillings coined out of it. This estimation is made, however, by the Lords of council & Session, from whom the greatest accuracy might have been expected. It is not conceivable that during the course of the sixteenth century, so long after the [dis=]covery of the Spanish west Indies, grain should have sunk near one third in its average Price, or in the real quantity of silver that was given for it. The ^{Market} price of Grain was in those times extremely fluctuating, much more so than at present, & people seem to have been so much at a Loss how to fix an average, that they were happy to catch at any average that had been

fixed

(注) 4. it のあとは *K* ではコンマだが、実際は *R* のようにセミコロンがある。

5. *R* は 'of a very great use' と 'a' を入れているが、実際には 'a' はない。

9. Loose] *R*; loose *K*. この行には 'The' と読める語を消している。

13. Boll] *R*; Bale *K*. 1523と1540のあとに書簡ではピリオドが書かれているが、*R* はこれをそのまま示している。
K では 1540 のあとにだけコンマを入れている。

14. 13S] *R*; 13s *K*. 4D] *R*; 4s *K*. tho] *R*; tho' *K*.

15. pound[s]] pound *K*; pounds *R*. この行より3行にわたって末尾に破損がある。実際には 's' はないのだが、補って読む。

16. Silver] *R*; silver *K*.

17. Shillings] *R*; shillings *K*.

21. この行の末尾にも破損あり。次行の '=covery' と文脈から考え合わせて、[dis=]と読む。

22. west] *R*; West *K*.

24. Market] market *K*, *R*.

(2頁) 1

5

10

15

20

25

30

fixed in some former period without always attending to the
 difference of circumstances. In the conversion Prices that
 are agreed upon in Leases, the option whether to pay or take
~~is~~ sometimes the rent in kind or in money, is sometimes
 in the Tennant, & sometimes in the Landlord. When it
 is in the Landlord, & when the Landlord generally resides
 upon his estate & chuses, for the conveniency of his
 family, to receive the rent in kind, it is very indifferent
 to him how low the conversion price is. In this neighbour=
 hood the price of a ^{good} fowl, a hen, has been for many years
 from ten pence, to a Shilling & fifteen pence. Sevral
 years ago a friend of mine converted all the Poultry
 upon his estate at a Shilling. Five pence, however, is a com=
 [=]mon conversion price in a lease, the option being in the
 Landlord. Leases of this kind have been let within
 [t]hese two or three years. I should be glad to know, if your
 Lordship remembers it, for I should be very sorry to
 give you the trouble to consult the record, whether in
 the leases of the Abbays & Bishopricks which you have
 looked into, the option was in the Landlord or in Ten=
 [=]nant. If it was in the former, as a Monastery is al=
 ways, & in old times a Bishop was generally re=
 sident, we need not wonder either at the irregu=
 larity, or at the lowness of some of the conversion
 prices. I have the honour to be with the grea=
 test respect & regard

My Lord

Kirkaldy

Your Lordships

12 March 1769

Most Obedient & obliged

Servant Adam Smith

(注) 7. chuses] R; chases K. この語のあとに書簡ではコンマがあり, chuses (=chooses) はあとの to receive
 に続けて読むのが正しい。

11. Shilling] R; shilling K.

13. Shilling] R; shilling K.

14. [=]mon] この行から3行にわたって文頭部に破損あり。

16. [t]hese] these K; [?] these] R. 実際は上に示した校訂のように追加した語で, 't' の部分だけ破れている。

19. Abbays] R; Abbaeys K. Bishopricks] K; Bishopriks R.

21. [=]nant] この文頭部にも破損あり。

28. Kirkaldy] K; Kirkaldy R.

29. March] K; Mar. R. Most] most K, R. Obedient] obedient K, R. この行にある March や
 obliged の 'M' や 'o' と比べて判断した筆者の修正。

(3頁) 1

If the rejoicings, which I read of in the public papers, in different places on account of the Douglass Cause, had no more foundation than those which were said to have been in this place, there has been very little joy upon the occasion. There was here no sort of ~~xxxxx~~ rejoicing of any kind; unless four schoolboys having set up, three candles upon the trone, by way of an illumination, is to be considered as such.

5

(注) 5. 消されている語は 'p' らしきもの以外は判読不能。

なお、この3頁の一節は Rae の *Life of Adam Smith* の p. 249 (大内訳『アダム・スミス伝』では pp. 309-310) に引用されている。しかし句読点は異なっている。

あとがき

前の二章において両教授による Smith の二書簡の転写を筆者の調査に基づいて比較検討してみた。両者の読み方の異なる箇所は下の注で具体的に示し、それに対する筆者の判読を明らかにしておいた。そのほか必要と思われる箇所には補注を加えてある。

二書簡を内容的にみれば、小池教授がすでに指摘しているとおり、主として『国富論』第一篇第十一章にある「過去四世紀間における銀の価値の変動に関する余論」にかかわりをもつのである。二書簡の中にみら

れる Smith の利用した文献などに関しては小池教授の解説を参照していただきたい。

本稿を結ぶにあたって、第一書簡の二頁目にある次の一節にだけ触れておきたい。それは二頁の十二行末尾からの「私自身の研究計画は私にほとんど余暇を与えてくれないほどで、しかもペネロピの織物のように進行しているので、いつ研究が終わるのかとも見通しが立たないほどです」という部分である。このことから『国富論』執筆のための準備に打ち込んでいた Smith の姿をうかがうことができるだろう。

(1978年3月)

(経済学部助教授)

注(17) とくに『スミス全集』の『国富論1』の pp. 198-201 およびその脚注を参照。